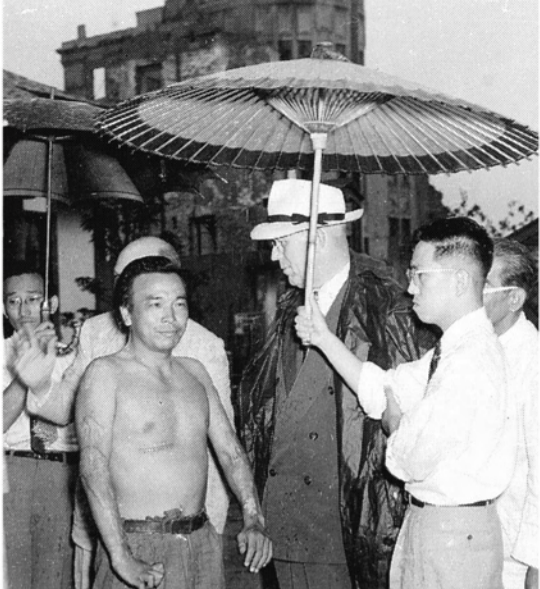


ヒロシマの記録

原爆・平和写真DBから

海外の来訪者



51年 ウォーレン
「原爆1号」と対面するカリフォルニア州知事ウォーレン(1891-1974)年。朝野の戦線を視察した帰途に訪れたのは米の雑誌から「原爆1号」と呼ばれた吉川清(86年死去)。ウォーレンは後に最高裁長官として学校での人種分離政策の撤廃を打ち出し、ケネディ大統領暗殺事件の調査委員会を率いた。



54年 モンローとデヤマジ
スーパースター夫妻の訪問。54年2月11日、マリリン・モンロー(26)と、元ニューヨーク・ヤンキース主砲のジョー・デヤマジ(41)は、62年に、元ニューヨーク・ヤンキース空軍に在籍し、その日に原爆ドームからABC(原爆被害調査委員会、現在の放射線影響研究所)を訪れた。56試合連続安打の大リーグ記録も残るデヤマジは、カープ選手の指導もした。

55年 郭沫若 原爆慰霊碑に入り、献花する郭沫若 55年12月16日 郭沫若(1892-1978年)は、戦前に日本への留学と亡命を経て、新生中国を代表する作家・政治家として知られた。中国科学院訪日学術考察団を率いて広島を訪れ、「平和共存について」との講演で「原水爆反対」を訴えた。後ろに見える原爆資料館はその年8月に開館。中国は64年、アジアで初の核保有国となる。



53年 ルースベルト夫人
(45年4月死去)の妻、エレノア・ルースベルト(1884-1962年)は、米知的交流委員の活動で訪れ、広島市佐伯区西宮にあった原爆で親を失った子どもたちが暮らす戦災児童育成所を訪ねた。左端は市長の浜井信三(68年死去)、隣は原爆資料館の初代館長となる長岡喜三(73年死去)。



57年 ネール 外国元首で初めて訪れたネール 57年10月9日 インド首相のジャワハルラール・ネール(1889-1964年)は、非同盟諸国リーダーとして米ソの冷戦下に核実験の即時中止を訴え、日本から熱い視線を寄せられた。「たくましい復興を遂げた市民の努力に敬意を表する」と平和記念公園を埋めた約3万人に演説し、会場からは万歳三唱が起きた。インドは74年、アジア2番目の核保有国となる。



59年 ゲバラ 訪れていた伝説的革命家チェ・ゲバラ 59年7月25日 アルゼンチン出身のエルネスト・ゲバラ・デ・ラ・セルナ(28)は、カストロとキューバ革命を築いた。59年、通商交渉のため東欧やアフリカ、アジアを歴訪。当時は駐日キューバ大使(中央)の原爆慰霊碑参拝として報道され、後に訪問が分かった。案内した職員に「日本人はこんな残酷な目に遭わされ腹立たないのか」と述べたという。

復興遂げた市民の努力に敬意／残虐な目に遭わされ腹立たぬのか

原爆を投下した米国からは、政治的に影響力を持つ人たちが早くからやってくる。その代表がエレノア・ルースベルトだ。原爆開発を命じた夫のフランクリン・ルースベルト大統領の死去後、国連の米代表に就き、世界人権宣言の採択に務めた。広島復興期の一九五三年、被爆地を踏んだ。「世界人類平和」を訴え、原爆投下については「戦争を一刻も早く終結させて破壊を打ち切り、いという願いの結果がこうなった」と思う。と米国の「原爆観」の原点ともいえる考えを述べた。それは「核抑止論」となっており、核抑止論は、大統領経験者で四四年に訪れたジミー・カーターは「広島を教訓に忘れ去られることはない」と平和記念公園で演説。ところが、九六年著した自伝(邦訳「信じて」と動く)で「訪問に及ばず、原爆投下の決断は次の使用への大きな抑止力になった(略)長い目で見て人類に恩恵をもたらしたのではないだろうか」としつつ、「核抑止論」への信仰の深さといえようか。



63年 李贇珠 被爆した朝鮮民族、李贇珠の慰霊 63年11月7日 李贇珠は、広島市置かれた第二師団司令部の教育参謀で赴任、原爆投下の目標となった相生橋近くで被爆。翌7日に32歳で死去。宮内省による「戦没者の発表を通じ、歴史を正しく伝える」原爆犠牲者となった。妻の李贇珠(95年死去)は、ソウルからご夫妻の陸士時代の同期生に招かれ被爆地を訪ねた。

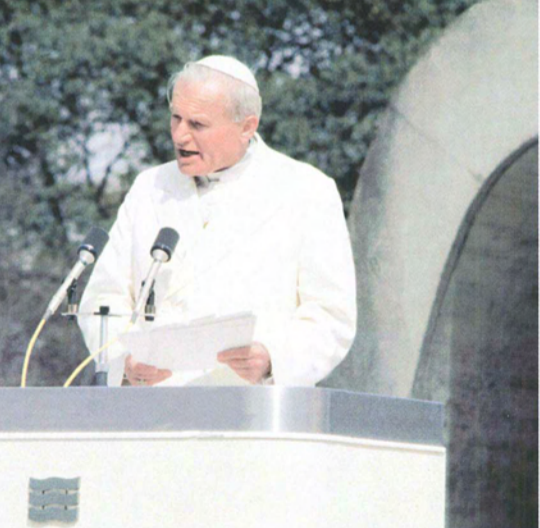
時代の顔 祈り綿々

でもあったインド首相のネール、知日派として知られた中国の郭沫若は、米ソの東西冷戦の時代に訪れて「原水爆禁止」を強く訴えた。市民も熱く受け止めた。しかも、現実の国際政治の動きはそのメッセージ、被爆地の願いを真切ってきた。それだけに、ローマ法王ヨハネ・パウロ二世が八一年に被爆地から世界に発信した平和と人権の言葉は今も重い。「過去を振り返ることは、将来に対する責任を担うことです。広島を考察すること、核戦争を否定すること、核兵器の使用をめぐめる国際司法裁判所(ICJ)の審理で、九五年陳述に立った当時の平和記念館長は、この言葉を引いて、使用の違法性を証言した。冷戦の崩壊で、今世紀に入り肉にも核の拡散が広がる。北朝鮮、イランの核開発。韓国は過去のウラン濃縮が明らかになった。何より米露をはじめ核保有国は軍縮どころか、小型核など兵器の最新化に関心を寄せる。ヒロシマで何が起き、続いているのか。真剣に見つめる訪問がますます求められる時代だ。(敬称略)



84年 マザー・テレサ 被爆者の手をとるマザー・テレサ 84年11月23日 アグネス・ボジャジョ(10-97年)、マザー・テレサと呼ばれたシスター(修道女)は、インドの貧困地区で救援活動を続け、79年ノーベル平和賞を受ける。広島訪問では、原爆慰霊碑に「聖水」をささげ、中区の原爆看護ホーム舟入むつみ園で被爆者の手をとって「神の祝福がありますように」と励ました。

戦争は人間の仕業です／世界の運命にかかわる人は訪れるべき



81年 ローマ法王 「平和と人権」を宣言するローマ法王 81年9月25日 ローマ法王ヨハネ・パウロ二世(80)は初来日の際、小書で平和と人権を世界に向け、「戦争は人間の仕業です」との言葉で始める平和と人権を9つの言語で読み上げた。「法王歓迎の集い」で公園を埋めた市民約2万5千人が熱心に聞きこった。



84年 カーター 米大統領経験者として初めて訪れたカーター 84年5月25日 ジミー・カーター(当時89)は、アジア州知事時代に地元へ進出した日本企業の招きにより来日。広島で1泊した。朝のジョギングをなし、平和記念公園で「世界の市民一人一人が不断に平和を求めなければならぬ」と演説した。



75年 アンジュイン 広島原爆の写真を背にするヒシの被爆者(ほく)者 75年3月15日 米軍による20代のヒシ水爆実験で「死の灰」が降ったラゴグラップ島の村長カーソン・アンジュイン(91年死去)は、広島からの専門医派遣を求めた。左は案内する原水爆代表委員の森澤市郎(91年死去)。アンジュインら島民は85年に島を脱出。マシヤル諸島に島での暮らしが続き、



90年 エリツィン ソ連改革急進派リーダーの献花 90年1月22日 人民代表議員ボリス・エリツィン(当時58)はソ連に複数政党の導入などを主張し、日本でも時の人となった。原爆資料館を見学して「世界の運命にかかわる人々はこの場所を訪れるべきだ」と述べた。翌91年にロシア共和国大統領となり、ソ連邦の消滅を宣言。99年プーチン首相を後継者に指名し、大統領を辞任



92年 ゴルバチョフ 原爆資料館を見学する元ソ連大統領 92年4月17日 ミハイル・ゴルバチョフ(当時61)は、前年のソ連邦解体で大統領を辞任し、広島を訪れた。核保有国の元首職としてはカーターに次いで2人目。「この町に来ると、政治と道義が分断することがいかに恐ろしいことかを意識する」と地元テレビ局主催の市民集会で述べた。その後も2度広島を訪れた



85年 ハーシー 「ヒロシマの後」取材のため39年ぶりに訪れたハーシー 85年4月23日 作家ジョン・ハーシー(14-93年)が46年、被爆者6人の体験を基に雑誌「ニュー Yorker」に著した「ヒロシマ」は世界的な反響を呼んだ。被爆40周年に再訪して6人のその後を取材。左は左に登場する一人である米元大使の森澤市郎(91年死去)。「ヒロシマ」は99年、米メディア界の投票で「20世紀のジャーナリズム活動のベスト100」の1位に選ばれた。